

がんの教室

田中 伸哉

②〇

IVRというがんの治療法をご存じだろうか。英語の「インターベンション・ラジオロジー」の頭文字で、インターベンションは介入、ラジオロジーは放射線の意味。つまり、放射線の一つであるエックス線を使ったコンピュータ断層撮影(CT)などで体内を

IVR治療とは

見ながら、体に器具を入れて行う治療法のこと。

例えば、注射針を用いてがんを直接治療薬を注入したり、血管に

カテーテルを入れてがんの位置まで伸ばして

治療薬を投与したりする。血流をせき止めて、動脈からがんへの栄養を断ち切ることもある。

IVRは、がんに限られた方法ではなく、心臓の血管が細くなった場合にも使う。足の付け根の血管をたどっていき、狭くなった血管をステントとよばれ

狙い定めて器具で治療薬

る網を使って広げる手法だ。脳の動脈瘤^{りゅう瘤}では、頭蓋骨を開けるとなく、動脈瘤にコイルを詰めて固める治療が行われる。

IVRは、がんの治療では肝臓がんで行わ

れる場合が多い。肝臓は場所によっては血管が複雑で、手術で切り取ることが困難なためだ。抗がん剤や放射線治療も効果が薄い。

10年前、白目が黄色くなった50代の男性を



診察した。若いころからウイスキーを毎日1本空けていたという。目が黄色いのは黄疸^{おうだん}と呼ばれる病態で、酒による肝硬変が原因だった。CTで肝臓に直径3センチのがんが見つかり、細胞の動きを止める作用のあるアルコールがIVRで注入された。がんは壊死^{えいし}。男性は今も元気だ。

現在ではアルコールはあまり使われず、電気でがんの塊を焼く場合が多い。IVRはがん患者の体への負担も少なく、有効ながんの治療法の一つになっている。

(北大医学部腫瘍病理学教授)